

---

# 【と・著】曖昧な二人の〇〇〇

ことむま！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【と・著】曖昧な二人の○○○

### 【Nコード】

N3243V

### 【作者名】

ことむまー！

### 【あらすじ】

頭よし口悪しのセーシユン真っ只中少年、未来也と、天然ぽんより幼女なジョシコーサー美彩ミヤアの、すれ違い行き違い、曖昧な関係のふたりがお届けするドタバタラブコメディ(?)果たしてミキヤはコンマ六メートルの距離を埋めることが出来るのか?!ノノお題【曖昧な二人の10の議題】より10のアイテムを使用したお題小説です。

(前書き)

【使用お題】曖昧な二人の10の議題

- \* 0 1 この距離
- \* 0 2 なかったことにして
- \* 0 3 瞼の裏
- \* 0 4 悩み浮上
- \* 0 5 つかずはなれず
- \* 0 6 なんてだよ。
- \* 0 7 歩幅、追いつけない
- \* 0 8 接触範囲
- \* 0 9 ひとり
- \* 1 0 今日を抜け出そう

アイツとの距離、コンマ六メートル。十六年間そのまんま。これ以上開くことがない代わりに、それ以上縮まることもないこの距離を、オレはいつから齒痒く思うようになったんだろうって、最近思う。

「未来也<sup>ミキヤ</sup>ツ！ 未来也ーッ！！ ほら、早くしなさいっ。美彩ちゃん  
んが呼びに来てくれたわよーッ！」

朝からうつさいババアの声で、オレは嫌でも夢の世界から叩き起こされた。

「……誰も呼びに来てくれとか頼んでねーし」  
オレは渋々身体を起こす。梅雨明けと同時に嫌がらせのような炎暑が続いてから半月以上が過ぎている。この頃のオレは、機嫌が悪い。全部この炎暑のせいだと思いたい。

「あぢいんだつつの。ガチで勘弁してくれよ」  
バケツの水をかぶったような、びしょ濡れのTシャツの裾を鼻先に持ち上げながら独りごちる。

「くっせー！！」  
不機嫌度が二百割増した。オレは着替えを引き出しから見繕いながら、図々しく我が家の如く階段を上って来るであろう美彩 ミヤアに向かって怒声を飛ばしておいた。

「ミヤア！ 部屋まで来んなッ！」  
ミヤア 自分の愛称を呼んでいるのか、彼女独特の返事なのか解らない声が、扉の向こうからギリで返って来た。

「でも、ミキちゃん。早くしないとサマスタに遅れちゃうよ？」  
ミヤアがいつまでも小学生のガキんちょみたいな甘ったるい声で、

カリカリと部屋のドアを爪で引つ掻きながら、偉そうに説教をかまして来た。

「そう思うなら先に行け。何も一緒に行く必要ねえだろが」

「独りじゃつまんないもん。ミキちゃん、一緒に行こ？」

「その呼び方もやめろっつってんのっ」

「ミヤア……」

力ない声が扉の向こうからかすかに部屋の中まで忍び込んで来る。ズキリと痛んだ何かが、不機嫌全開だったオレを、別のなんかに変えてしまった。

「あゝ……おふくろにジューズでも出してもらって待ってるよ。シヤワー浴びてから行く」

「うんっ」

……くっそ……っ、ゲンキンな奴！

鼻歌混じりで階段を降りるミヤアの足音を聴きながら脱力した。

そもそもオレは、こんなめんどくさいヤツといつまでもつるんでいられるほどマメなタイプじゃないはずなのに。

オレがミヤアを中途半端に避けるようになったのは、中二か中三辺りの夏、だと思う。

『ミキちゃん、なんか、におっ』

アイツがそう言ったから、ということだけは鮮明に覚えている。

確か部活のあとの、帰り道だったと思う。炎天下でのサッカーの試合、いい感じにリーグ戦を勝ち進んでいたときで、スタメンじゃないオレにも出番があつて、とにかく張り切っていた反面、すっげえ疲れる毎日でもあつたんだ。

おふくろにぶつくさ文句言われながらも、それくらい耐えてやらあ！ ってくらい、疲れてた。何を文句言われていたかと言えば、まあ汚ねえ話なんだが、風呂、こいつがチョーメンドクセー。疲れる。

で、ミヤアのその発言なわけだ。かなりショックを受けたオレは、

今では陰で“潔癖症”という皮肉なあだ名で呼ばれているらしい。

ヤロウどもに言わせれば、それほどでもないって言われている。女子には……訊けるかア！

でも、ダチトモの彼女に、ぼそつと言われた。

『でもそのミヤアちゃん？　って子もデリカシーがないよねえ。普通言わないよね。それかもっとオブラートに包むとかさあ』

ダチトモに神経質だと忠告された話の流れで、ソイツの彼女が一緒にいるにも関わらず、ついウツカリ口を滑らせ、そんなエピソードを語ってしまった。自己正当化したかっただけなんだが、彼女の発言に対し、オレはなぜか無性に力チンと来てしまった。オレを庇ってくれてるにも関わらず。気づけば必死になってミヤアのフォロ―を入れてるオレと、啞然とした顔でオレの顔をしげしげと眺めているダチトモとその彼女がいたりなんかした。

『なあんだ。そういうことだったのか。ゴメンごめん』

ふたりしてオレにそう言い、ニヤニヤと笑った。オレにはまるで意味不明。

『聞かなかったことにして』

ダチトモの彼女はそう言って、今度ミヤアとダブルデートしようとかほざいてた。

あの頃は、オレもガキんちよだったんだ。丁度声変わりしてたころでもあり、保体の授業もろくすっぽ聞いてなくて、輝けるゼ口点を取っていたり。

「いわゆるニジサーチョーって奴だったんすね」

体臭がきつくなくなるのも、声が変わるのも、急にミヤアを見下ろすような背丈になったのも。まあ、あとあんま言葉には出来ないアレとかソレとかコレとかも。

「未来也ーッ！　あんたいい加減にしなさいよッ！　講習代、幾ら払ってると思ってるのオー！！」

おふくろの怒声で我に返る。オレの右手はいつの間にか、下着と

Tシャツを左手にしたまま、ハーフパンツを出す作業をサボっていた。時計を見ると、さっき確認した時間からいつの間にか十分も過ぎていた。

「ダーツ！ うっせ解ったよババア！！」

「なんですってツ？！ ちょっと、あんた今すぐ降りてらっしゃいっ」

「あ、おばちゃん、私が呼んで来てあげる」

「来んなああああ！！」

あゝ、もうメンドクセー。朝からマジでくたびれた。

「も、マジでミヤアを自分ちの娘みたいに家の中で勝手にうるつき回らせるなっつうの」

せっかくオイシイ夢を見てたのに。あともうちょっとだったのに。こうして目を閉じてみれば、瞼の裏には鮮明な映像が流れるほどのパラレルな世界が復元されるのに。それらが全部、おふくろの怒声で吹き飛んだ。

「クソババア……ちつくしよ……うっ」

オレのやり場のない憤りと漲るアレなアレは、結局憎悪に変換されておふくろに向けられた。

どうしてオレの家にも関わらず、ミヤアの動向を探りながらコソコソ浴室に行かにならん。　　と思いつつも抜き足差し足忍び足で、バスルームの扉をそつと開ける。引き込み戸をそつと閉めて、浴室乾燥機の付属品らしい物干し竿（すげえ細くて心許ない、アレよ）をつつかえ棒にして簡易施設。急いでシャワーで汗を流し、クール系のボディソープで身体を洗って頭も洗って。

「おお、未来也、入ってんのかよ。風呂長えぞ、お前」

浴室と脱衣場を隔てる薄いプラスチックドアの向こうから、弟、<sup>マキヤ</sup>将来也の文句が飛んで来た。

「だー、てめえも起きたのかよ。つか、どうやって入ったあ？！」

「あ？ つつかえ棒か？ あんなん力技で吹っ飛ばせるぜ」

「……」

だからおふくろがキレたのか。何回も買い直してる、誰もあなたの粗チンなんか見たくないよ、とか言ってたのか。

(つか、粗チンとか息子に言う台詞じゃねえだろ！)

「あと一分待てや」

マキヤはどつかの誰か(うるせー！ オレだよ、どうせオレのことだよ！)と違って、中二のくせに彼女がいやがる。で、確か昨夜、デート、とか言ってた。中坊のガキンちよがデートとか、一体どこ行って何してんだかって感じだけだ。

「……とと。ンなしようもないこと考えてる暇ねえじゃん、オレ」  
オレは自分にそう説教し、気持ちと一緒にカランもキュツと締めた。

オレやミヤアが通っている塾では、成績ランクが四部構成になっている。上位から、トップ・グレート・レギュラー・スタンダード、トップがいわゆるエリートコース、っていうわけだ。自慢じゃないが、オレはトップ。そしてなぜか残念なことに、ミヤアもこの春からトップコースへレベルアップしたらしい。

トップコースは特別講習として、サマースタディ、つまり夏期講習が特別仕様となっている。『よく遊び、よく学べ』がモットーのこの塾では、九日間の講習カリキュラムを前後半に分け、その間に一日だけ、講師のつき添いのもと海水浴というレジャータイムが組み込まれているのだ。成績上位者へのご褒美ってヤツだな。スポンサーは親だけだ。親が講習代、講習代とうるさく言うのは解らないでもない。

「えへへ、私は今年、初参加だから嬉しいな。スイカ割りとかバレーベキューとか、キャンプファイヤーみたいなのもするんでしょ？」

駅に向かってオレの隣を歩くミヤアが、ものすごくとろけそうな顔で笑って言った。家もミヤアの家も共働きだから、そういうのっ



てあんま経験がないんだ。

「あゝ、みたいだなあ」

「みたい？ ミキちゃんは去年もトップカリキュラムだったでしょう？ グレートにいなかったし、夜も部屋の電気消えてたよ？」

「サマスタには参加してたけどさ、去年は雨で中止になったんだよ。何が悲しくて体育館でバスケットとか……思い出したら行く気が萎えて来た。この話、ヤメ」

すっかり忘れていたけれど、そういう可能性もあったのか。急ぎよ、悩み浮上。中二の悪夢が蘇る。

「つつかさ、お前、あんまこっち寄るな」

「なんで？」

なんでだとう?! 滾る怒り、握る拳。思わずミヤアを睨み下ろす。

「……なんででもだよ」

こいつ、完全に自分の言ったことを忘れてる。理由なんか言えるかバカヤロウ！ 言えばヤブヘビじゃねえか、このクソ幼女！

言うに言えない腹立たしさが、オレにミヤアから自分の目を逸らさせた。

「あ、ちよつと待ってよー」

文句を垂れるミヤアになどお構いなしで、オレの脚の運びは勝手にその歩幅を広げていった。

「大丈夫だよ、そんなに急がなくても。集合は八時半じゃん」

そんな声が急速に小さくなっていく。

「うつせ黙れっ。お前が早く来たせいで、このクソ暑い炎天下にとつとこ追い出されたんだろがっ」

気づけば返すオレの声も、息の上だったものになる。

「だって、だって……ッ」

いつの間にか、足が勝手に駆け足でミヤアから逃げるようにダッシュしていた。そのまま後ろに向かって怒鳴るように叫んだ内容は、半分だけホントだけど、もう半分は本心じゃあなかったんだ。

「だいたい、塾の女友達だっているだろうがよっ。なんでオレにつきまとうんだよ。小坊のころと違うんだから、周りから色々言われるの、すんげえウゼえ！」

「……ミヤア……」

そんな小さなつぶやきが、けたたましく泣き喚く蝉の声に混じってオレの鼓膜をちよっとだけ揺らした。猛ダツシュしていた足を、ちよっとだけとめて振り返る。

「……」

もんのすげえ、胸が痛んだ。泣きそうな顔をして走るミヤアが、汗だくになって追いつこうと足掻いてる。遠い昔を思い出した。近所の男子にいじめられて、泣きながら助けを求めて駆け寄って来た小さな小さな、妹みたいだったミヤアの幼い顔。

「だつて……はあ……はあ……」

つかずはなれずの距離で、ミヤアは立ちどまり、膝を両手で覆って身を屈めた。

「ミキちゃんが、はあ、はあ、私のこと、はあ、はあ………避けるから。……私が、はあ、はあ、追っ掛けるしか、はあ」

「おま、ちよ、まずは息吸え、息ッ」

現在時刻は八時十分前。集合時刻まで四十分あって、ここから集合場所の駅前広場までは五分ちよっとでたどり着ける。

「……朝マック、食いたくなつた。ジュースくらいおごってやる」  
つい衝動的に、そう言ってしまった。そしたら、泣きそうだったミヤアの顔が、全開のひまわりみたいな笑みを零してオレを見上げた。

「うんっ！！」

どっかすっごく遠くの方で、“ズツキュ　　んツツツ！！”って音がした、気がした。

集合場所の駅前広場と反対側の出口すぐそば、パーティーションで仕切られほどよく個室っぽい雰囲気を保てるファーストフード店の一席を陣取る。

「サマスタ、一緒にサボろうだア?!」

叫ぶと同時に右手に挟んだハツシユポテトがオレから逃げた。

「しーっ、ミキちゃん、声が大きいっ」

ミヤアがそう言いながら、すかさず落ち掛けたオレのハツシユポテトを宙でキャッチした。オレはミヤアの意外なまでの迅速さに驚いて思わず目を剥いた。

「なんでだよ。ついさつき“初参加だから嬉しい”って言ってたじやねえか。矛盾してるぞ」

オレがミヤアから手渡されたハツシユポテトにかじりつきながらそう言くと、ミヤアは無言で携帯電話の画面をオレに向ける恰好で差し出した。

「な……んだ、コレ。つい今さっきの受信じゃねえかよ」

受け取った携帯電話の画面を凝視したまま、オレは思ったままを独り言のように呟いた。

ブリブサ女、ウザいんだよ。サマスタ来るな。来たらコロス。

その言葉に続く絵文字は、ナイフや注射器、ドクロのマークに、とにかくぼよんとしたキャラのミヤアには、かなりのメンタルブロウを食らわせる類の絵文字が意地悪く連なっていた。

「なんだ、この“ブリブサ女”って」

「カワイ子ぶってるブサイクな女、って意味なんだって。あ、ミキちゃん、気をつけて。そのあと」

「うおあっ!」

画面を凝視していたら、いきなり画面が切り替わって、シヨツキングホラーな画像が待受画面いっぱいに現れた。血まみれの顔で白目を剥いて、ずぶ濡れの髪を振り乱した女の画像。マジでオレの心

拍数が倍化。

「おま、よく叫ばなかったな」

俯き加減で肩をすぼめていたミヤアの頭を、思わず昔みたいに撫でていた。

「もう慣れちゃったあ」

少しだけ苦々しいものを含んで、だけどやっぱり屈託のない幼い笑みを零すミヤアがなんだかもものすごく、……痛々しい、と思ったんだ、多分。

「慣れたって、どういことだよ」

いい加減、野太過ぎてこええぞオレの声。ってくらいはらわたが煮えくり返っていた。露骨過ぎるオレの不機嫌な声を聞いて、一瞬ミヤアが答えを探すように右へ左へと瞳をさまよわせた。

「んん……、ほら。最初、よく先生に怒られてたでしょう。私、騒がしくって」

「ああ、トップにクラス替えしてからか。だってお前、たかがゴキだの蛾だったので……って、あ。まさか」

「えへへ。先生にチクったところで、どうしようもないでしょ？

もっとひどいことされるのやだし。一年の辛抱だしー、とと思ってあ、そんでね、と言ってミヤアはいそいそと自分の大きなバッグをまさぐり出した。

「嬉しいってのはね、きつとミキちゃんなら私のお願い叶えてくれるって知ってるから」

「待てコラ」

「一緒におサボリしてね、デイズニリーゾートへ行こうと思って通帳丸ごと持って来た！」

「ちょっと待てコラっ！ 人の話聞けっ！ つか、なんだそのオイシイ展開は！」

「オイシイ？」

しまった……ッ！ 大事そうに通帳を両手でつまみ、誇らしげに見せるミヤアに骨抜きにされた。通帳にじゃない、取り敢えず今回

に限り素直に認めよう、まる。

（あのな、お前、自分が何言ってるか解ってるか？ デイズニーリゾートつつつたら、東京だぞ？ 新幹線だぞ？ パスポートが樋口一葉レベルなんだぞ？ しかもランドとシーで別料金だぞ？！ 時間的にも金的にも絶対に、ムリ！ 日帰り出来ねえだろ。っていうか、親になんて言うんだバカヤロウっ）

言われずとも小声になる。なぜかつい頭まで下げて、過剰に人目を避けながら懇々と説得しているオレがいた。

距離、コンマ六メートル。センチ換算で六十センチ。それがこの日いきなり、三十センチまで近づいた。

（だから。そこをミキちゃんが担当するのっ。だって口は悪いけど、頭はすっごくいいんだもんっ）

赤ん坊や幼児の必殺技、無垢な清純スマイル。今の言い方、きつと語尾にハートマークか音符がついていた。

（……ひと晩だけだかな。今夜辺りバレルとして、明日の晩には帰って来るんだからな）

無垢とハートマークに負けたオレは、一秒未満で親への弁解をすっかり構築し終えていた。

リピート・アフター・ミー。

オレもミヤアも、旅行の経験がほとんどない。どちらの親も共働きで、しかもサービス業だったりなんかして、一般の休日が繁忙期ってヤツで、近所のプールとか遊園地とか動物園とかをローテーション。そんな幼少期だったわけで、初めての長旅に胸ときめくのはそのせいなわけで。

「えへへ、なんか、すっごいドキドキするねっ。修学旅行なんて目じゃないってくらい」

ただでさえ垂れている目尻が、よけいに下がって眠たげな猫目に

なる。そんなミヤアを見て、初めて気がついた。最近、こんなミヤアの顔を見たことなんてなかった気がする。

「……そうだな」

もつと早く気づいてやりやよかった。そんな罪悪感が、ミヤアの言葉を聞いたオレに同意の言葉を紡がせた。

「ミキちゃん、元気ないね。どうしたの？」

「どうして、って、おま、状況を解ってるか？」

夏休み真っ盛りの舞浜周辺で空いているホテルなんざありやしなかった。ケータイからネット検索したけど、まったく一件も空きがなかった。普通のビジネスホテル、それもすっげえ舞浜から離れた千葉市内のホテルをようやく確保。しかもシングル一室に無理やり簡易ベッドを頼み込んで。当然ながらオレ名義で、ミヤアは妹ってことにした。

到着するのは多分昼過ぎ。遊んで飯食って、きつと終電終了、イコール、タクを使ってお帰りコース。金が幾らあっても足りやしねえだろ。

という台詞は、今のミヤアには酷だと思ったので、一人金策を考えていたわけだ。

なんだかんだ言っておレを信用してくれてるおふくろが、オレに預けてくれたキャッシュカード。学校での備品購入や、塾で予定外の時間に終わって終バスが終わったときなどのタクシー代をここから出さない、と言って預けてくれたカードが財布に入ってる。

オレは心の中で、久しぶりに「母ちゃん」と呼んだ。「母ちゃん、ごめん」と謝った。電車を降りたら、まず郵便局のATMを探して残高照会しようと思っていた。

「ちゃん。ミキちゃん、起きてますかー？」

「おあつ！」

耳もとに聞こえた声よりも、いきなり頬へ押し付けられたひんやりとした感触で悲鳴を上げた。

「自販機あったから、コーラ買って来たよ。急に俯いてだんまりし

ちゃったから、覗き込んだら目えつぶってるんだもん。私、タイクツ。だから起きて」

「……」

こいつ、いつから泣きそうな顔して笑うようになったんだろう。って、ちよつと、思った。なんていうか、すぐメンドクセー。オレのキャラが崩壊していきそうで、どうリアクションしていいのかわかんなくなる。一事が万事、ずっとこんな調子だった。東京駅についてからも、そのあとATMを探して練り歩いたときも、迷いながら乗り継ぎ電車を探して飛び乗ったときも。

気づけばものすごく久しぶりに、ずっとミヤアの手を握ったまま、コイツを引つ張り回していた。まだおむつをしてたかしてなかったか、ってくらいチビっこだったころみたいに。

いつの間にかコンマ六メートルの距離は、ごく一部だけ、コンマゼロになっていた。ごく一部、だけどあちこちいろんな意味でいろんなトコが、コンマゼロになっていた。

旅の終わり。それは、突然にやって来た。

「早く走れっ。今なら、まだ終電に間に合うっ」

最後の花火を見終えてちよつと。みんなが出口に向かい出したころ。きつともう二度と来れないと思ったオレたちは、閉園の出入り口の混雑具合をかなり甘く見ていたせいで、最後の最後までシンデレラ城の前で余韻に浸っていた。

「待……って、ミキ、ちゃ……歩幅、追いつけない……ッ」

ミヤアが途切れ途切れにそう訴える。やっと出口の混雑から解放されて、走れる状態になったのに。そんな苛立ちがいつものオレに戻して、ミヤアに乱暴な言葉を吐いていた。

「お前が最後まで見たいっつったんだろッ。駅まであとちよつとじやんか、踏ん張れよッ」

親からの鬼着信が怖くて、もとい面倒で、ケータイの電源を切っていた。もちろんそれはミヤアも同じで、見知らぬ土地にふたりつきりで、誰の助けも差し伸べる手もないんだから、甘えられてもオレだって困るんだ。無計画な衝動旅行は、やっぱり失敗だった。タクシーで千葉市内まで行くだけの金が残ってはなかった。幸い帰りの切符を先に買っておいたし、ホテルの宿泊料は前払い制だったので先に納め終えている。

「う……ん、ごめ……ごめ、んね……ミ、キ」

ミヤアは最後まで言い終えることが出来なかった。

「ミヤア?!」

ずるりとコンマゼロの接触が解けていく。痛そうな恰好でミヤアがアスファルトに膝を打ちつけた。その顔が青白いのは、色とりどりのライトアップがミヤアの顔に色を反射させているから、というだけではなかった。

「おいっ。ミヤア!」

オレの苛立ちがピークに達した。ずっとミヤアに向けたものだと思っていたそれは、オレ自身に向けたものだと、バカなオレはそのとき初めて自覚した。

いい人に会えたのが不幸中の幸いだったと思う。

ぶっ倒れたミヤアを抱えて途方に暮れていたオレに声を掛けてくれたのは、関西から来たお孫さんを連れて来場したという千葉市在住の六十代くらいの夫婦だった。事情を訊かれたので、妹と泊まりで遊びに来たけれど、とウソの説明をしたのに、彼らはそれを信じて、タクシーの相乗りを申し出てくれた。荷物みたいにミヤアを肩に担いだ途端、おばさんの方が目を丸くした。

『あの、ちよつと。すごく言いにくいんだけど』

ミヤアのパステルピンクのスカート、後ろ側の方に、小さな小さな赤い染みがちよつとだけついていた。おばさんは、かなりタクの運転手を急ぎ立てた。そしてようやくビジネスホテルに着いたかと



思うと、おじさんに何やら内緒話をして、一目散に飛び出していった。

『兄ちゃん。家のばあさんの勘違いだったらすまないけど、一応念のためにつつうから』

ミヤアは生理による貧血で倒れたんじゃないか、と言われた。

部屋に運ぶ途中で、ミヤアの意識が覚めた。

『うえ？ あ！ ご、ゴメンっ、ミキちゃん、下ろしてっ！』

汗ばむほどに密着していた肌が、ポチ、と小さな音を立てて離れていった。接触範囲八十パーセントが、あっという間にゼロパーセント。それまでものすごい勢いで過剰労働させられていたオレの心臓も少しずつ平常勤務に戻っていった。

「はあ……」

ベッドに寝っ転がって、バスルームの扉をぼんやりと見つめる。どうしても先にバスルームを使うのがイヤだから、と、オレのあとで、今ようやくミヤアが汗を流しているところだ。

「ガチで幼女仕様だったのかよ」

いわゆる初潮、だったらしい。ガッコで知識は入れてたんだろうけど、実際にその場になると、どうしていいのか分からんもんらしい。ミヤアは親切なおばさんに女性のいろはをバスルームで教えてもらっていた。オレはその間、おじさんから説教を受けていた。いくら異性の兄妹でも、なんとなく分かるだろう、とか、今は学校でも習つらしいじゃねえか、とか。拳句、結局ウソがばれて、家に電話をさせられた。おふくろと親父が、受話器越しでも判るほど大きな声で、おじさんに謝罪とお礼の言葉を繰り返し、しつこく名前や連絡先を尋ねていた。

女が強えのは、お母ちゃんになってからだ。それまでは野郎が守ってやんなきゃダメだろう。

おじさんの言葉が、痛かった。いじめのこととか、今回のコレのこととか、全部オレの目が節穴だったせいだ。ぽよんとしてるヤツだからこそ、オレが気をつけてやんなきゃいけなかったのに。

「両方の親がタク飛ばして来るっつってたよな……」

四発分のグーパンチは、どれだけ顔が崩れるんだろう、って、少しだけ心配した。

「ミキちゃん」

バスルームの扉がゆっくりと開き、おずおずとした様子でミヤアが顔を出した。バスタブに湯を張って、ゆっくりと浸かったらしい。真っ赤なほっぺたは、昔とおんなじチビっこいガキンちよの顔つきそのものだった。

「ごめんね。いっぱい迷惑掛けちゃった。ホントに、ごめんね？」

うん、分かったから頼むから、キャミソールに短パン姿で出て来んなよな。ドレッサーの鏡がたたんであつてよかった、って、すっげー思った。引き攣れる頬の筋肉が、今どんな顔をしているのかイヤっていうほどオレに突きつけて来る。いつもどおり、コンマ六メートルまでミヤアが近づいた瞬間、オレは入れ替わるみたいにベッドから身を起こして立ち上がった。

「どっか行くの？」

「ちげーよ。腹、痛いんだろ。親父たちが来るまでベッドに入って寝とけ」

吐き捨てるようにそう言ってベッドに腰掛けたミヤアを見下ろし、一瞥をくれてやる。別に怒っちゃいないが、どういう顔してコイツを見ればいいのかわかんなくなっていた。

「ミキちゃんは？　ひとりはやだよ」

「どこにも行かねーよ。親父たちが来るまでフロントのソファで寝とく」

イヤになるくらい低い声が床を這う。潤み始めたミヤアの瞳から、我慢ならなくて思い切り目を逸らした。

「ミキちゃん……あのね、私ね、ホントはね」

って、声がか細いくせに、なんでオレのシャツを引っ張る力がそ  
んだけ元気なんだっつうの。人の気も知らないで、この幼女なジヨ  
シコーサーは、腹が立つほど、歯痒いほど、なんっつうか、こう……。  
「はあ……」

全面降伏。ホールドアップ。女って、ホントにずるい、と思った。  
オレはかなり荒っぽくシャツの裾を引っ張ってミヤアの手を振り払  
った。しゃくり上げる声をBGMに、ドレッサーの椅子をベッドの  
脇にセットする。背もたれを前に、それを抱えて椅子にまたがった。  
「ホントは、なんだよ。だいたい見当がついた。絶対知ってるヤツ  
誰とも会わなくて済むどっかで、言いたいことがあつたんだろ？  
そんなら何もこんな遠くまで来なくたって、家でも構わなかつた  
だろが」

そう問い掛けるオレの心臓は、いたって穏やかだった。下世話な  
あれやこれやが、どっかへ飛んでいった。懐かしい兄貴分の心境つ  
てのを取り戻し、オレは上掛けをめぐって、ミヤアの肩をトンと突  
いた。

「ほ？」

へんな声を出して仔猫みたいにぼてんと転がったミヤアの身体に、  
そつと上掛けを掛けてミヤアを促す。

「それとも、家のおふくろはシフト制のパートだから、いつ帰って  
来るかわかんない、とでも考えて無茶言ったのかよ」

ずり上げた上掛けの端から、そつと垂れ目だけが覗く。それが一  
度瞬きしたあと、小さくコクリと頷いた。

「ミキちゃんと喧嘩してるって知ったら、おばちゃんが心配して、  
またミキちゃんを叱るかな、って」

「は？ 喧嘩？ いつ？ 誰が？ 誰と、だつて？」

多分そう尋ねたときのオレは、はとが豆鉄砲を食らったような顔  
をしていたに違いない。

「だってミキちゃん、ずうっと怒ったまんまだもん。もういつから

か忘れちゃったくらい、ずっと、ずっと」と

そう言ったかと思うと、また目が潤み出す。思い当たるだけに、こっちも口角が引き攣った。

「いじめなんてね、全然、ヘーキなの。だって、ミキちゃんがホントの私を知っててくれるもん。でも、ミキちゃんに嫌われるのだけは、ヤだ。私、なんか悪いことしたなら、昔みたいにちゃんと教えてよ」

例えば今あるいじめも、昔のオレなら気づいてくれていたはずだとミヤアは言う。知ってて知らんぷりしていたのかと、今日の今日まで思っていたというのも初めて聞かされた。

「なんかね、ミキちゃんに、訊けない雰囲気だったの。だけど、サマスタのメンバーを見たら、今年はミキちゃんと仲のいい早田くんとか赤澤くんとかもいなかったし、ミキちゃんは女子とつるむなんてのはまずありえないし。だから、あのメールをもらうまでは、まだサマスタに行かなくちゃ、とも思ってた、迷ってたの。行こうかって方に気持ちが悪くいたんだよ。ホントだよ？」

サマスタの中間日に当たるレジャーの日なら、ふたりつきりになれるかと思っ、という声がかぐもった。

「勇気出して、ちゃんとミキちゃんと話して、それで愛想笑いばかりの自分から抜け出そう、そしたらまた昔のミキちゃんと自分に戻れる、って。思った、のに……ッ」

ぼふりと頭から上掛けをかぶった頭が震えていた。誰も知らないこの場所が、自分の見たこともないこの景色が、ミヤアの今まで溜め込んで来たものを全部吐き出させた。

「なんで私ばかりいじめられるの？ ミキちゃん、どうして気づいてくれないの？ ぶってるって、なに？ 私のどういふところがぶってるの？ ブサイクは認めるけど、でもそれがいじめる理由なんて、おかしいよ」

ミキちゃんの傍にいたくて勉強も頑張って、トップクラスに入っただのに、ミキちゃんは気づいてくれない。女子のいじめがもっとひ

どくなつた。お父さんやお母さんには、知られたくない。せつかく喜んでくれてるのに、塾をやめたいなんて、言えない。学校が別々なのに、塾をやめたらミキちゃん与会える時間がなくなっちゃう。支離滅裂な、思いつくままに話が飛び交う、文句の嵐。ちっちゃなミヤアがそこにいた。

「……ミヤア、ごめんな」

ちよつとだけためらったけど、上掛けをそつとめくつた。ぐしゃぐしゃな顔のミヤアを見たら、迷いも吹き飛んだ。

「ミキちゃん」

阿と言えば咩の呼吸で、ミヤアが起き上がる。小さな子どもみたいに、昔そのままに、ミヤアがオレの首にしがみついて来た。

「喧嘩してねーよ。怒ってもいねーし。たださー」

妹を子守りするみたいに、ミヤアの背中をトントンと叩きながら、ゆっくり言い含めるように、半分だけ本音を口にした。

「おまえ、臭いつつたじゃん。オレだって、嫌われたくないつづの。そしたらあんま近づかないようにしよう、とか思うだろ、ふつ

ー

小さな「え？」という声が、オレの鼓膜を揺さぶった。

「そんなこと、言っていないよ」

「ゆつた」

「におうつて言ったけど、くさいなんて言っていないもん」

は？

「それ、どう違うんだ？」

ちつとばかりミヤアを引き剥がし、顔を覗きこんでみる。

「なんかねー、落ち着く？　なのにね、ココがね、きゅつづつん、

とかも、するの」

ミヤアはそう言つて、謙虚過ぎるほど謙虚な自分の胸を指差した。

「えへへ、なんかね、そついうにおいするようになったんだよ、

ミキちゃん

「は？」

「だからね、くさい、じゃあなくって、におう、なの」

意味不明な内訳を言うだけ言っと、猫毛の頭が再び懐に納まる。

「ミヤア〜、きもちー」

「……」

やばい……アドレナリンが過剰分泌されて来た。ええとそれはなんていうか、つまり、ですね。単純にガキンちょモードで無自覚なだけで、つまり、コイツは、つうか、コイツも、えっと。

「ミキちゃん、すっごい心臓がバクバクゆってる。ひよっとして、怒ってる？」

「~~~~~……ッ」

「ミヤッ！」

とりあえず、ゲンコツを食らわせておいた。

なんとも曖昧で摩訶不思議なひとときは、親父どもの怒声が飛び込み、中途半端なまま終わった。グーパンチは家の親父からの一発で済んだ。ただしおふくろにはキックをお見舞いされた。我が家のそんなやり取りの合間に、ミヤアが自分の両親に事の次第を話してくれたらしい。

「いつまでも子どもでごめんね、未来也くん。一人っ子だから、つい甘ったれで未来也くんを頼るから」

もう、と言って頭を小突かれていたミヤアは、昔と変わらない顔で笑っていた。

いじめの件は、メールが証拠になって、ミヤアの親父さんが塾へ直談判して教育的指導をお願いすると言っていた。その後、オレは塾の女子軍団に呼び出された。

「す、好き、だったから」

「は？」

「だーかーらっ。すみれはあんたが好きだったのっ。けど、あんた

は美彩しか見てなかったでしょう。美彩はそれに気づかない鈍感だし、あんたたちって部外者のあたしたちから見ても、かなりガチでウザかったのよね」

「けどー、高校生にもなって親にチクるとか。ゲンメツ、って感じ」

とかなんとか、散々罵声を浴びせられ。暴言を吐くだけ吐くと、女子軍団は最後にオレの横っ面を一発ずつ引つ叩いていった。これでもう二度とミヤアにあんなメールを送らないっていうから、オレはひたすらに耐えた。

「ほら、すみね。あんたも散々泣かされたでしょ」

同じクラスだったららしい、オレにとつて全力で初見にしか見えないう女子が、スカートを握りしめた手をふるふるとさせていた。

「……さい」

「あ？」

「ごめんなさいっ。美彩にも、そう言っておいてっ」

すみねと呼ばれた女子はそれだけ言うと、ほかの女子を掻き分けて逃げるように走り去って行った。

「ちょ、すみねっ。……何それ、それじゃあまるで私たちが悪者みたいじゃない」

「っていうかあんたらがうざい態度してるのが元凶なのよっ。受験に向けて恋愛セルフ封印してるっつうのに、この能天気バカップル」

「や、別にカップルじゃないんすけど」

というオレの答弁を聞く女子はあっという間に消えていなくなっていた。

あとで判ったにおいのもと。ひげが生え始めたころから使い始めたシェービングクリームのおいらしい。

「あー！ これっ、このにおいっ！」

「だーからっ！ 顔近づけんな、このアホガキっ！」

その距離、コンマゼロメートル。オレの欲望願望我欲的意味合いのそれとはかなり異なるけれど。でもまあ、気長に待とうと思う。心身ともに、成長が遅いみたいだから。

「ほ？ ミキちゃん、顔が真っ赤。もう十月だよ？ まだ暑い？」

「ちげーよっ。つか、うつせーよっ」

そんなオレの、日々唱えるおまじない。

ままごとな今日を抜け出そう。明日にはきつと、ミヤアも今日よりも成長してくれるはずだから。

もうね、自覚したら負けだな、って、思った。この曖昧な関係が、時々しばしばかなり相当、歯痒く感じるけど。でも、コンマ六メートルからは卒業出来たし。

「ミヤア、大学受験、合格したらお祝いの交換しようぜ」

「あー、それいいっ。私ねー、合格したら、今度こそ絶対、デイズニーシーにも行きたい！ この間はランドしか回れなかったもんっ」

「あ、それいいな。んじゃ、お年玉とバイト代は今から使わないで温存だな」

「けつてーい。あ、あとお父さんとお母さんにもオツケーもらえるように、いい子とこっつと」

「だな」

「あ、そんでミキちゃんは、何が欲しい？」

「デイズニーシーが実現したときに言う。そんでもって、絶対もらう」

何それ、それじゃ用意出来ないじゃん、と膨れるミヤアに意地悪な笑みを零してやった。



(後書き)

あとがきまで目を通していただきありがとうございます！

「遊んで楽しんで、それでいて鍛錬！」が同盟主旨(主旨?)の「ことむま!」メンバー、第二走者」と「でございます!」

「こ」「と」「む」「ま」全員が、それぞれまるでカラーの違うお話を書く某なるう作者でございます。

読者の皆様には、作品そのものをお楽しみいただくほかに、「この人、実はだれ?」なんて推理を楽しんでいただくのも横道的な一興かと。^^

本作は如何でしたでしょうか?

「と」としては日頃の作風や書き口とは違うひと品にしてみましたつもりです。

(そ、そうか? 本当に違っているのか??)

まだまだ稚拙で修行中の身、「と」でございます。

忌憚ない感想講評アドバイス etc、お待ち申し上げます!

なお、本作シリーズとしてまとめております。

現在「と」のほかに「む」が作品公開中。

是非そちらもご覧あれ

都合やお題テーマがインスピレーションを感じさせてくれたら、「こ」「こ」や「ま」も同シリーズ内に作品を投稿すると思われま

!!是非!!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3243v/>

---

【と・著】曖昧な二人の〇〇〇

2011年7月31日03時30分発行